

恋愛に対する積極性／消極性の規程要因

—大学生を対象とする量的調査より—

○福岡県立大学 中村晋介

1 目的

近年「若者の恋愛離れ」がアジェンダ設定され、さまざまなレベルで言説が飛び交っているのがである。この件について、青年心理学や発達心理学の分野では、既に一定の研究の蓄積がなされている。しかし、心理学者による解析の射程は、もっぱら若者の恋愛に対する積極性／恋愛行動と、精神的健康や自我発達の程度といった心理的要因との連関に置かれており、社会学的な視線においてははささか物足りなく感じてしまう（これは学問の目指す方向性の違いである以上、やむを得ないことであり、心理学という学問を否定しているのではない）。若者の多くが「結婚するためには恋愛関係を維持・構築しなければならない」と盲信する中で、非婚化の帰結としての少子高齢化が深刻な社会問題となっているわが国において、社会学／社会意識論の立場から、若者の恋愛に対する態度、特に恋愛に対する積極性／消極性の規程要因を検討する必要性が認められる。

2 方法

この問題意識に基づき、発表者は2013年度秋に、恋愛に対する大学生の態度に関する量的調査を実施した。国立大学2校、公立大学1校、私立大学2校で、自記式の調査票を授業時間、昼食時間などに配布・回収した（1200票を配布し、1093票の有効票を得た）。

3 分析と結論

回答者のうち、「現在、恋人がいる」と答えた者の比率は、全体の30.9%（男子33.7%、女子29.6%）であった。また、「現在、恋人がいない」者のうち、「今後、恋人作りや異性との交際を積極的にしていきたい」と考えている者の比率は55.1%であった。これらの数値は、国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向基本調査」（2010年）で得られた数値にほぼ対応していた。

得られたデータセットに対して、単純集計、各種クロス表による分析、「恋愛をしない理由」について投げかけた質問群に対する因子分析、複数の変数をカテゴリー化した多重応答分析などを実施した。これらの分析で得られた知見より、1)大学生は、大学内の友人関係などにおいて、恋愛に積極的な群と、恋愛に消極的な群に二極分化している（通っている大学の種別や、居住形態、可処分所得などの属性変数には無関係）、2)恋愛に対する大学生の積極性／消極性は、大学入学以降の人間関係や、それに基づく社会化過程にも影響されているが、それ以上に、彼／彼女たちの過去（中学生～高校生時代）における「学校内での地位」（本田 2011:50-53）に強く影響されているとの結論が得られた。

文献

本田由紀,2011,『学校の「空気」』岩波書店。

国立社会保障・人口問題研究所,2011,「第14回出生動向基本調査——結婚と出産に関する全国調査・独身者調査の結果概要」。 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf

附記

- ・具体的な分析結果については、当日掲示するポスター及び配布資料を参照されたい。
- ・本研究は、日本発達心理学会第23回大会委員会企画シンポジウム「未婚・非婚——なぜ結婚しないのか」（2012年3月、コーディネーター：山本ちか、登壇：金政祐司・高坂康雅・中村晋介）の席上で行われた議論を受け継いで実施された。